

揺らぎと強ばりのなかの主権——歴史叙述としての保守主義からのアプローチ

平成27年10月9日

鹿島平和研究所 外交研究会

佐藤一進

- 1 保守のアポリアを超えて
- 2 国家主権の揺らぎと強ばり
- 3 主権概念を脱神学化する——歴史叙述の能力として
- 4 「歴史の終わり」からの脱却へ

- (1) 保守主義とは、きわめて高度な実践性を重んじる統治の技法である前にまず、近代という時代状況の渦中で、ルネサンスを経て古典古代にまで遡及する人文主義の伝統になおも則ることから切り拓かれた知的、精神的、理論的、そして思想的な技法にほかならない。それは、長期にわたる反復的な修練によって体得される経験的な知識や技法であるという意味で、メチエ (*métier*) とも呼ぶべきものである。自律というテロスのための保守という方法は、実践的に保守する対象としての伝統を慣習のなかから選り抜き、言説化するべく、人文主義という知 (*science*) のメチエを陶冶し、それを遂行することから導かれ、確立される。(拙著『保守のアポリアを超えて——共和主義の精神とその変奏』NTT出版、2014年、248頁)
- (2) はたして、われわれは、次々と継起するみずからの知覚を、一定の一貫性を有する歴史叙述 (historiography) へと編み上げ、その物語 (story) のなかで、みずからの経験と存在を、不断の危機のただなかでの均衡として了解しえているであろうか。なおも自律としての善き生を志向し、不完全な時間の次元の彼方から届くその理念の輝きに導かれ、そこに向かわんとするはてなき旅のパートナーシップを構成しえているであろうか。むしろ、未来に関する空想によって造られるものとして以外に、われわれは、現在を生きることさえしなくなっていないであろうか。ふと気づけば、無数のイリュージョンに依存する政治と経済のハイパー・リアルな世界に、はたまた、個人的な空想と情念、野心と虚栄心から築き上げられたバベルの塔に住まうことを余儀なくされてはいないであろうか。つまり、われわれは、極致的な主観性の世界、形而上学的に完成された ^{エクストラ} ^{シヴィック} 超 = 領域的な世界へと、ついに移住しつつあるのではないであろうか。(同上書、253頁)
- (3) 国家とは (定義すれば) 一つの人格である。また、その人格の行為は、多くの人びとの相互的な信約によって、彼らの平和と共同防衛を目的として、彼らすべての力と手段をその人格が適当だとみなすとおりに用いることができるよう、彼ら一人ひとりを当の行為者そのものとする。そして、この人格を担う者が主権者と呼ばれ、主権権力をもつと言われる。(Thomas Hobbes, *Leviathan*, Cambridge University Press, 1991, p. 121)

- (4) 主権者とは、例外状態に関して決定をくださる者をいう。(Carl Schmitt, *Politische Theologie. Vier Kapitel zur Lehre von der Souveränität*, 9. Aufl. Berlin 2009, S. 13)
- (5) 国家の目的の一つは、みずからの過去を定義して未来を定めようと模索することによって、みずからの歴史に対してある種の支配を及ぼすことである。リベラルな国家は、こうした営みのなかで個人をみずからへと結びつける。ここではこの営みは、自分たちの歴史化されたアイデンティティを決定するにあたって市民として行動する自由を求める営みである(それゆえに、かつて歴史は「自由の歴史」として定義されていた)。さらには、これまで政治的な主権は、みずからの歴史的な過去と未来を規定する国家の手段であったから、主権を持つ自律的な政治共同体の市民でないならば、歴史においても政治においても個人を自由とみなせるかは疑わしいとされていた。……したがって、主権と歴史叙述の間には結びつきがある。共同体は、みずからの現在を統制するために必要とされる自律的な政治構造を持つならば、歴史を書く。(J・G・A・ポーコック『島々の発見——「新しいブリテン史」と政治思想』犬塚元監訳、名古屋大学出版会、2013年、361頁。ただし引用文は原文を参照して適宜改めた。以下同様)
- (6) 政治共同体が自分たちの歴史を批判的に語る能力と、政治共同体がそうした歴史を未来へと続けていく能力には関係がある。この能力を私は主権と呼んでいる。歴史がなければ主権は存在しえないと言ってもよい。グローバルな戦線ではおそらく、そしてヨーロッパの戦線では確実に、アイデンティティ、歴史、主権、政治が攻撃されていると私は理解している。私は多元的な政治の歴史の試みと、国家やそれぞれの歴史をグローバルな文化に吸収させる試みを対置している。そのグローバルな文化は商品化の文化であり、それに付随する官僚制支配がこれを押しつけている(同上書、392頁)
- (7) ……国家は、力の体系であり利益の体系であると同時に、価値の体系でもある。われわれは自分の欲する行動をとって生活している。しかし、それが社会に混乱をもたらさず、多くの人とのつながりを保っていくことができるのは、そこに共通の行動様式と価値体系という目に見えない糸が、われわれを結びつけているからなのである。……この行動様式と価値体系は歴史的に作られてきたものだから、われわれが意識するよりはるかに深く、われわれの心のなかに食い込んでいるのであり、同じ理由から、世界のすべてに共通する一般的なものではなくて、国や地方などによって異なる特殊なものである。そして日本と外国を分けているのは、人間が勝手に引いた国境線ではなくて、むしろ言語や習慣に体现された行動規準と価値体系の相違なのである。(高坂正堯『国際政治』中公新書、1966年、17頁)
- (8) 結局、これまでの内容を次のように要約することができる。すなわち、主と奴との出現に帰着した最初の闘争とともに、人間が生まれ、歴史が始まった、と。すなわち——その起源においては——人間はつねに主であるか、奴であるかであり、主と奴とが存在する所を除いて真の人間は存在しない、と。……そして世界史、人間の相互交渉や人間と自然との相互交渉の歴史は、戦闘する主と労働する奴との相互交渉の歴史である。そうである以上、

歴史は主と奴との相違、対立が消失するとき、もはや奴をもたぬために、主が主であることをやめるとき、そしてもはや主をもたぬために奴が奴であることをやめ——さらには——もはや奴がない以上新たに主にもならぬとき、歴史は停止する、と。（アレクサンドル・コジェーヴ『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』上妻精・今野雅方訳、国文社、1987年、58頁）

(9) ところで、（一九八四年から一九五八年までの間に）合衆国とソ連とを数回旅行し比較してみた結果、私はアメリカ人が豊かになった中国人やソビエト人のような印象を得たのだが、それはソビエト人や中国人がまだ貧乏な、だが急速に豊かになりつつあるアメリカ人でしかないからである。アメリカ的生活様式（American way of life）はポスト歴史の時代に固有の生活様式であり、合衆国が世界に現前していることは、人類全体の「永遠に現在する」未来を予示するものであるとの結論に導かれていった。このようなわけで、人間が動物性に戻ることはもはや来たるべき将来の可能性ではなく、すでに現前する確実性として現われたのだった。（同上書、246頁）

(10) 人間が再び動物になるならば、そのもろもろの芸術や愛や遊びそれ自体が再び純粋に「自然的」にならねばならない。そうすると、歴史の週末の後、人間は彼らの記念碑や橋やトンネルを建設するとしても、それは鳥が巣を作り蜘蛛が蜘蛛の巣を張るようなものであり、蛙や蟬のようにコンサートを開き、子供の動物が遊ぶように遊び、大人の獣がするように性欲を発散するようなものであろう。……だが、それだけではない。「本来の人間の決定的な無化」はまた本来の意味での人間の言説（ロゴス）の決定的な消滅をも意味する。ホモ・サピエンスという種である動物は音声上の或いは手振りでの記号に条件反射的に反応し、彼らが「言説」と自称するものはかくして蜂のいわゆる「言語活動」と似たようなものになるであろう。そうすると、消滅するもの、これは単に哲学或いは言説による知恵の探究だけではなく、この知恵自体でもあることになる。なぜならば、ポスト歴史の動物には、もはや「世界や自己の（言説による）認識」はなくなるであろうからである。（同上書、245頁）

(11) フランシス・フクヤマは（おそらくは）次のように想定していた。境界線など考慮しないグローバルな市場が普遍的に勝利すれば、国家の発展や革命の過程が歴史を創り出していくことはなくなるだろう。国家や革命を生み出す政治は、人間が自分たちの歴史を制御しようとする手段であり、「歴史」とは、そうした過程が人間の制御下にある場合のその名称である。今後は、人間が自分たちの思想や行動によって歴史を創るのではなく、市場の力が歴史を創るであろう。……そこでは、「文明」が歴史を解体し廃止して、野蛮だけが歴史を保持する。（ポーコック前掲書、371頁）

(12) 第一に、ポスト産業化のグローバル経済は、国家、国民共同体、そしてそれらの周囲に形成された市民社会の間にある境界線を捨て去る——流行の言葉では「越境する」——ような人間相互の関係の型を生み出している。その帰結は、多くの人間がもはやそうした結びつきのなかに生きているとも、自分たちの政治に参加しているとも、継承ないし相続してきた自分たちの文化に帰属しているとも感じられないという事態である。文化的コミュニケーションは、行為的でも社会的でもなく、より電子的となっている。人生の型は流動化しており、それは大

衆心理において即座に伝達され、急速に置換されるイメージと化している。そうした環境においては、歴史を保持することも、みずからの持続性を記録する歴史を備えた国家や社会に住まうことも、まったく困難である。第二に、これは上述した状況の顕著な特質というだけかもしれないが、人間はいまや情報爆発のただなかに生きており、そこにおいて人びとは、自分たちに伝達される情報の大部分が利那的で虚構的な性格を持つことを強烈に意識している。しかし、人びとはそこに埋没しており、唯一手にしうる社会空間を構成するのは情報と虚構である。こうして情報と娯楽の間の境界は侵食され、きわめて特異な帰結として政治は喜劇となり、歴史は虚構となっている。（同上書、397頁）